聖　書：ヨハネ 16：7〜11
説教題：その方が来ると
日　時：2017 年 6 月 4 日（朝拝）

この場面はイエス様の十字架前夜、弟子たちへの告別説教が語られている箇所です。イエス様はご自分が弟子たちから去って行かれることについて話をしています。弟子たちとしてはいよいよこれから素晴らしい神の御国を打ち建てられると期待してイエス様に従って来たのに、イエス様は自分たちを後に残してどこかへ去って行かれると言う。そんな彼らに対してイエス様はこの夜、繰り返して聖霊の約束を与えています。15 章 26〜27 節：「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。あなたがたもあかしするのです。初めからわたしといっしょにいたからです。」　前後を見ると分かりますように、弟子たちは厳しい環境に置かれます。世はイエス様を迫害した世として、弟子たちをも必ず迫害すると予告されました。そんな中で弟子たちは縮こまってしまうのではなく、イエス様についてのあかしをする。しかし彼らは生まれ持った人間の力で証しするのではありません。聖霊があなたがたを助け導いてくださるという約束が語られています。そんな流れの中に 7 節以降の言葉もあります。

まず一つ目に見たいことは、7 節でイエス様が「わたしが去っていくことは、あなたがたにとって益なのです」と語っていることです。弟子たちとしてはイエス様が自分たちから離れ去っていくこと以上の損失は他に考えられないと思って悲しんでいました。しかしイエス様は「わたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです」と言っています。この「助け主」とは 15 章 26 節にも出て来ましたように御霊のこと、聖霊のことです。この聖霊が来るという祝福は旧約時代からずっと預言され、約束され、待ち望まれて来たものでした。たとえばイザヤ書 32 章 15 節：「しかし、ついには、上から霊が私たちに注がれ、荒野が果樹園となり、果樹園が森と見なされるようになる。」　イザヤ書 44 章 3〜4 節：「わたしは潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。彼らは、流れのほとりの柳の木のように、青草の間に芽ばえる。」　その他、エゼキエル書 11 章や 36 章には「わたしはあなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える」とありますし、ヨエル書 2 章 28〜29 節：「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがた

の息子や娘は預言し、年寄りは夢を見、若い男は幻を見る。その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。」　このような聖霊の祝福は、神が終わりの日に与えてくださる特別な祝福として、神の民がずっと待ち望み、あこがれて来た祝福です。天国にそのままつながるような至福の時代です。その聖霊が来てくださるということをイエス様は語っておられます。

しかし弟子たちとしては、両方を私たちが持つというわけにはいかないでしょうかという思いを持ったに違いありません。聖霊の祝福にはもちろんあずかりたいが、イエス様にもここにいて頂きたいと。しかしイエス様のお答えは「それはできない。わたしが去って行かなければ助け主は来ない」というものでした。これは地上の定員は一人であって、イエス様と聖霊は同時に地上に存在できないからということではありません。そうではなく、聖霊の祝福はイエス様の贖いのわざに基づいて与えられるものだからということです。イエス様はこれから十字架の死へと向かい、三日目に復活し、父なる神の右の座に上げられなければなりません。この救いのわざが成し遂げられてこそ、聖霊の祝福は地にもたらされるのです。つまり旧約から約束されて来た聖霊の祝福は、ただ漠然と与えられるものではないのです。それはキリストが私たちのために尊い犠牲を払ってくださるという贖いのわざを経て私たちに与えられるものです。言い換えれば聖霊の祝福はキリストの祝福に他ならないのです。聖霊はキリストのわざに基づき、キリストから汲み、キリストから私たちに分け与えてくださるのです。

私たちは時に、イエス様が地上におられた時代に私も生きていたならどんなに素晴らしかっただろうかと思うことがあります。その方がもっと素晴らしい祝福に生きることができたのではないかと。しかし今日のイエス様の言葉によればそうではありません。イエス様が去って行って、聖霊が遣わされた今の時代に生きている私たちの方がはるかに益であるとイエス様が言っていることを私たちは心に留めて感謝する必要があると思います。ここでの比較は決してイエス様がともにいる方がいいか、それとも聖霊の方がいいかということではありません。そうではなく、イエス様が肉体においてともにいる方がいいか、それとも贖いを成し遂げた勝利の主として聖霊においてともにいる方がいいかということです。そして後者の方がはるかに素晴らしいと言われているのです。

ではやがて遣わされる聖霊はどんな働きをしてくださるのでしょうか。この後も聖霊の働きのことが語られますが、今日注目する 8〜11 節に語られているのは、この世に対

する聖霊の働きです。8 節 :「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」　ここを理解するために二つの大事なポイントを押さえておきたいと思います。その一つ目は、この聖霊の世に対する働きは突然神秘的になされるものではないということです。先に 15 章 26〜27 節を読みましたように、ここの文脈において聖霊のあかしは迫害における弟子たちの証しとセットで述べられています。つまり 16 章 8 節で述べられている聖霊の働きも弟子たちの証しと無関係に起こることではない。むしろここはイエス様についてあかしする彼らの福音宣教のわざに伴う聖霊の働きのことを述べているものと見るのが適切だと思います。もう一つは聖霊の働きの焦点は、この後の 14 節にはっきり語られますように、イエス様の栄光を現すことです。それと関係なく、ただ人々の誤りを示して終わりということは聖霊はしない。つまり世に誤りを認めさせるという聖霊の働きは、ただ否定的なものではなく、イエス様の栄光を現す働きとの関わりの中で行なわれるものです。すなわちこの世の人々を主イエスへの信仰へと導くためのものです。そのために聖霊は世に、その誤りを認めさせるのです。

ここに罪について、義について、さばきについて、聖霊は世に誤りを認めさせるとあります。一つ目は「罪について」です。「罪」は世の人々が最も認めない事柄でしょう。多くの人は私は罪人ではないと考えています。なのに教会に行くと「あなたは罪人だ」と言われると憤慨した気持ちで帰って来ます。まして 9 節に「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです」とあるのを見ると、益々反発したくなる。イエスを信じないからと言って罪人なのか、と。しかし聖霊は私たちの心に働いて、私たちに罪を認めさせるのです。イエス様はこのヨハネの福音書ではまことの光として語られています。そして世はこのまことの光を受け入れず、これを憎んだと記されています。光で照らされると、自分の悪いところ、見たくないところ、醜いところがさらけ出されて我慢ならなくなるので、人々はこのまことの光を退け、むしろやみを愛した。そのように私も光を退け、神が送ってくださったまことの光を無視し、退けて歩んで来た。そうして神に逆らう道を歩んで来た。そのことを認めるように聖霊は導いてくださるのです。反対から言えば、もし私たちが自分の罪を認めているなら、イエス様を信じることに向かうはずでしょう。イエス様の十字架を軽蔑したり、無関心でいることはなく、それは私の救いのための神の方法だと感謝して、この方を信じ、受け入れるはずです。しかしイエス様を退けるのは罪が分かっていないから。聖霊はその罪について私たちの誤りを示し、私たちにそのことを認めさせるのです。そしてイエス様を信じるように導くので

す。

二つ目は「義について世にその誤りを認めさせる」。多くの人々は自分を正しいと思っています。少なくとも犯罪を犯すようなどうしようもない人々とは違い、全うな生き方をしている者である。だから死んだら当然天国へ行けると思っています。一部の人しか天国へ行けないとするキリスト教の考え方は狭すぎると思っています。しかしこれは義の考え方が誤っているからということです。10 節に「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」とあります。この世はキリストを十字架につけて自分たちは正しいと思っていましたが、神はこの方をよみがえらせ、天に迎え入れることによって、この世の判決をひっくり返されました。当時の人々は神殿の儀式を守り、安息日等の律法の規定を守って、自分たちは正しくやっていると考えていました。しかし神の目から見るとそれは全然義ではない。イザヤ書 64 章 6 節 :「私たちの義はみな、不潔な着物のようです」　私たちが義と考えていることは神の前では全然そうではない。人間的な誇りや功績は神の前では悪臭を放つようなものでしかない。そのことを聖霊は私たちに悟らせ、認めさせるのです。そのことを通してまことの義はただキリストにこそあることを示し、その方の完全な義に頼るようにと導くのです。

三つ目はさばきについて世にその誤りを認めさせる。この世の人々は自分はさばきなどとは関係がないと思っています。もし罰されるべき人がいるとしても、それは他の人であって私ではない。この世がやがてみな神の前でさばかれる日が来るというような話は信じない。しかし聖霊はこの誤りも正すのです。11 節に「この世を支配する者がさばかれたからです」とあります。12 章 31 節 :「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。」　ルカの福音書 10 章 18 節 :「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました」　ヘブル書 2 章 14 節 :「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし」。　このように悪魔へのさばきは行なわれました。とするならこの世を支配する者にそのまま従っている者たちは、やがて同じくさばかれる運命にあります。そのことを聖霊は悟らせるのです。

実にこの罪について、義について、さばきについて世にその誤りを認めさせることは、人間わざでは到底無理なことです。人々は反発し、拒絶するだけです。ただ聖霊がその人のうちに働くことによって、聖霊は罪を深く自覚させ、自分の義がどんなにみすぼら

しいものであり、そのままではさばきに価するかを確信させてくださるのです。その働きによって人は悔い改めと信仰へと導かれるのです。

最後にこの約束が成就したペンテコステの当日の出来事を見たいと思います。使徒の働き 2 章にその様子が記されていますが、1〜4 節に聖霊が天から注がれたことが記されています。そして人々は神の大きなみわざについてあかしし始めます。そしてペテロが立って説教します。その中の 22〜24 節 :「イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身がご承知のことです。あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」　まさにペテロはここで人々がイエス様を信じなかった不信仰の罪について、また人々はイエス様を十字架につけたが神はこの方をよみがえらせてその判決を逆転されたことについて述べています。33 節 :「ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。」　そして 36 節でこう結びます。「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

これに対して世の人々はどう反応したでしょうか。37 節を見ると分かりますように、人々は心を刺されました。自分たちの誤りを認めました。これは聖霊の働きなくしてどうして可能だったでしょうか。もし聖霊の働きがなければ人々は反発し、ペテロたちを捕えたかもしれません。そしてイエス様と同じように十字架につけたかもしれません。しかし人々は心を刺され、悔い改めへ導かれ、この日に 3000 人もの人々が回心してバプテスマを受けたのです。ここに御言葉とともに働く約束の助け主、聖霊の力が力強く示されました。この方が来る方がはるかに益であること、またヨハネの福音書 14 章 12 節でイエス様が言われたように、「イエス様よりも大きなわざを行なう」者とされることが示されたのです。

今日の御言葉を通して思わされることは、この聖霊の働きによって今日の私たちの信

仰があるということです。私たちは決して自分の賢さや知恵によって主を信じる者となったのではありません。私たちは一人一人みな難しい者たちでした。しかし聖霊が御言葉とともに私たちの内に力強く働いてくださったので私たちは突然、自分の罪を自覚しました。自分が考えていた義は全然義と呼べるようなものではないこと、またこのままではさばかれるべき者であることを認めるようになりました。そうしてイエス･キリストへの信仰へと導かれたのです。私たちはこの聖霊の働きに今朝、心から感謝したいと思います。この聖霊がこれからも天の御国に入るまで私たちの歩みを守り導いてくださいます。

そしてもう一つ思わされることは、今日の御言葉は私たちの証しの歩み、宣教の取り組みについての大きな励ましであることです。私たちは人間の知恵やテクニックによって、人に救いの必要性を自覚させることができるのではありません。それをなせるのはただ聖霊です。聖霊こそが罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせる。そのことを思うなら、私たちは誰かに福音を伝える際、この聖霊に祈ることを大事なこととしなくてはならないのではないでしょうか。人の心を目覚めさせ、再生の恵みを与えることができるのは聖霊なる神です。そのことに信頼し、祈りつつ、みことばを伝えることに励むべきではないでしょうか。

主イエス様は私たちのために十字架へと赴き、大きな犠牲を払い、三日目に復活し、天に昇られて、この祝福を勝ち取ってくださいました。そしてこのペンテコステの日、約束の聖霊を遣わし、私たちをその祝福の下に生きる者としてくださいました。私たちは今朝、このように自分の信仰の歩みがあることの内に、聖霊の尊い働きがあったことを覚えて感謝したいと思います。そしてこれからも人の心の目を開き、罪を自覚させ、救いへ導くことのできるのは聖霊であることを告白しつつ、この方に祈り、期待し、信頼しながら、どんな時代にあっても主の証しをなし、神の御国の完成のために用いられる歩みへ進みたいと思います。